日本人英語学習者の中間言語構造
ーbe 動詞の誤答パタンについてー

伊藤　千寿

1．中間言語と誤答分析

これまでの先行研究において、言語学習者の誤りのパタンにはある程度の法則性が見られるということが、多くの研究者達によって確認されてきている。そして、そのいくつかは日本の中学校での英語学習指導の場においても確かに見られるものである。例えば "*My father like fishing."のように 3 人称単数現在形の"s"が欠落するとか、"*This morning she is got up early." のように be 動詞と一般動詞とを併用する、などはその典型であり、異なる年度、異なる学校において同じパタンの誤りが繰り返し現れている。

このような誤りを「学習の失敗」ではなく、学習者にとって必要不可欠な過程と捉えるべきであるとの考えを示したのが Corder(1967)である。つまり、学習者はその言語の習得に至るまでの過程として誤りのある文を作るのが自然なのであり、その誤りのパタンは学習者の習得レベルに応じて変化していくのである。その意味で、ある時点における学習者の誤りのパタンは、その時点での学習者の習得レベルを反映しているものであると言える。Corder(1967)は、このように規則的に体系として現れる誤りを「エラー(error)」と呼び、そのような「エラー」を学習者独自の文法として持つ「学習者言語」に Selinker(1972)の "Interlanguage(日本語訳では「中間言語」)"という用語を与えている。

「エラー」には、母語からの影響によって生じるもの(Interlingual Errors)と、母語に関係なくすべての学習者にも共通して生じるもの(Developmental Errors)とがある。また、指導方法や教材の配列によって生じる「エラー」もある。そして、Corder(1971)が述べていたように、同じ母語、同じ学習経験を持つ学習者は同じような中間言語を持つようになる。したがって、ある特定の言語を母語とする学習者の中間言語構造を明らかにすることができれば、その母語話者の習得過程がどのようになっているかを知ることができるのであり、「誤答分析研究」や「中間言語研究」といった領域の研究は、そのような期待のもとに行なわれてきたのである。

2．研究の背景

日本人の英語学習の場において見通しを持った指導を行なうためには、日本人の英語習得過程がどのようになっているかを知る必要がある。そのための背景知識として、まず日本人がどのような条件下で英語学習を行なっているのかということをおさえておく必要がある。ここではその日本人の英語学習環境について少し述べてみたい。

Johnson and Newport (1989)の研究データによると、言語習得に最適な時期は7歳であり、その後、言語習得能力は年齢と共に少しずつ下降していく。そして、大多数の日本人が本格的に英語の学習を始める中学入学時というのは、言語習得に最適な時期をかなり過ぎているのであるが、まだ大人よりは有利に学習を進めることの出来る年齢である。その習得能力も学年が進むとともに下降していくことを考えると、中学1年時は英語学習において最も大切な時期ということになる。

もう一つ重要なことは、日本人は英語を第二言語としてではなく、外国語として学習しているということである。日本の社会では、英語が使える方が便利ということはあっても、英語を使えないために社会生活が成り立たなくなるようなことはない。したがって日常生活の中で英語の必要性を感じることもなく、ほとんどの日本人にとっては英語を使う場面は学校や塾などでの学習の場に限られる。Richards (1972)によると、このような状況下での英語は、コミュニケーションの手段というよりも国際理解や異文化理解を主たる目的とする教養として学ばれる。最近、日本の英語学習の目標として「コミュニケーション能力の育成」が前面に掲げられるようになっているが、それでも日本の社会に英語を使わなければならない場がほとんど存在しないことを考えると、日本人にとっての英語は「第二言語」ではなくやはり「外国語」であると言える。

ただ、英語からの借用語は日本語の中に広く浸透して日常的に使われており、そのため、カタカナで覚えているものとはいえ生徒が中学に入学する段階で持っている英語の語彙はかなりのものである。最近では、小学校での外国人英語指導助手との交流会で簡単な英語を学ぶ機会も多く、生徒によっては中学入学以前に塾や通信教育によって英語を学んでいる場合もある。したがって、本格的に英語学習を始めるのが中学入学時であるとは言っても、全くゼロからのスタートとなるわけではない。

3．研究の目的と方法

本研究の誤答分析は、前述のような条件下で英語を学習する日本人中学生の英語についてその中間言語構造の一端を明らかにすることを目的としており、それが日本人の自然な英語習得過程についての見通しにつながり、効果的な英語学習指導のための一助となることを期待するものである。今回分析の対象となったのは中学1年生58名、中学3年生61名による英作文であり、その日程とタイトルは以下のとおりである。

3年生	2001.	4. 17	"My Family"
	2001.	6. 12	"My Favorite ____"
	2001.	7. 18	「のび太くんの自己紹介」
	2001.	11 .16	「日本の有名人」
1年生	2001.	7. 19	「自分のことについて英語で書いてみよう」
	2001.	11. 6	「自分や家族・友達などについて英語で書いてみよう」

3年生の第3回の英作文は、あるマンガの主人公の立場から自己紹介文を書いたものである。いずれの場合にも、教科書やノート、辞書などを使うことや、質問をしたり相談をしたりしながら書くことを許可していたので、これらの英作文は生徒が自力で書いたものとは言えないし、実際には現れるはずだった「エラー」がかなり回避されているものと思われる。また、本研究では文法上の「エラー」のみをその対象とし、語用論的「エラー」や表記法上の「エラー」などについては扱わない。

ところで「エラー」は第1回の英作文においてすでに法則性を持って現れており、中でも動詞に関わる「エラー」が多い。本研究ではその中でも特に be 動詞の「エラー」に焦点を絞って分析を行なっていく。分析の過程でそれぞれの「エラー」が Developmental Errors であるかどうか、(つまり、その「エラー」がすべての英語学習者に共通のものであるのか、それとも日本人のみに起こりうるものであるか) を判断する際には、Richards(1971)および Dulay et al. (1982)による Developmental Errors の表を参照する。Richards(1971)の表では、日本語、中国語、ビルマ語、フランス語、チェコ語、ポーランド語、タガログ語、マオリ語、マルタ語、インディアン諸語、西アフリカ諸語の母語話者に共通して現れた「エラー」がリストアップされてあり、一方 Dulay et al. (1982)の表では、母語としての英語習得過程と第二言語としての英語習得過程との対比がなされ、両者

に共通の「エラー」がまとめられている。

なお、「エラー」をピックアップする際、1つの文の中に2つ以上の「エラー」が見られることもあり、その場合には一つの文が2つ以上の分類項目に該当することになる。例えば

*My brother and father is played baseball yesterday.

という文では不必要な"is"が使われているだけでなく、複数の主語に対して"is"という形が選択されているという「エラー」も含まれているのである。

また、1つの「エラー」について必ずしもはっきりとした説明を与えることができるとは限らず、二つ以上の原因が考えられる場合や原因が特定できない場合もあるということを想定しておかなければならない。したがって、考察に当たっては、「エラー」についての完全な説明を求めることは無理であるということを前提とし、現時点において考えられる説明を可能な限り求めることを目標とする。

4．分析結果と考察

以下に、前述の方法による分析を通して得られた「エラー」およびその考察を例文と共に示していく。なお、例文のつづりの誤りはすべて修正して記述してある。

4.1. be 動詞と一般動詞の併用

この中で「be 動詞＋一般動詞」の形をとっているものは、Richards(1971)の表にも Developmental Error として挙げられており、したがって、日本語以外の言語を母語とする英語学習者にも共通に現れる「エラー」であることが確認されているものである。以下の例文を見ると、この場合の be 動詞はただ主語と一般動詞とを繋ぐためだけに使われているようである。

[1] *My brother is play baseball everyday.
[2] *My brother and my father are use computer.
[3] *I'm speak Japanese.
[4] *My brother and father is played baseball yesterday.
[5] *This morning she is got up early.

同じように be 動詞が主語と助動詞とを繋いでいる例としては

[6] *She is must get up at six.

のような文がある。また、このタイプの文を否定文にする場合には、

[7] *I'm don't speak French and Portuguese.
[8] *I'm do not like music.

のように be 動詞によって主語と一般動詞の否定形とを結ぶ方法と、

[9] *I'm not like study.
[10] *She is not likes shopping.

のように be 動詞そのものを否定形にする方法の、2つのパタンが見られた。

ところで、[7][8]の否定文と[9][10]の否定文とでは、どちらの習得レベルが上であると考えるべきだろうか。筆者としては、これらは同じレベルのものであるとの考えである。[7][8]は be 動詞の否定文の作り方が、[9][10]は一般動詞の否定文が定着していない結果であり、どちらにしても両方の否定文が定着したときに、学習者は上のような構造の文があり得ないことに気づくのではないだろうか。

次の文では、一般動詞の目的語がさらにその後に続く be 動詞の主語となっており、be 動詞以下がなければ一般動詞を用いた文としては正しい構造になっている。

[11] *I like Singer is Kiyotaka.
[12] *She got gold medal is Sydney Olympic.
[13] *I like Junichi Okada is the best in the group.

これらは一般動詞の目的語にさらに情報を付け加えるために be 動詞を用いたものと捉えることができる。ただし[11][12]については、対応する日本語文と比較してみると日本語の語順による影響も考えられる。

[11]' 私の好きな歌手は清貴。

[12]' 彼女が金メダルをとったのはシドニーオリンピック。

このような構造の文はRichards(1971)やDulay et al. (1982)の表には見られず、日本人に特有の「エラー」である可能性がある。

次の例文は、対応する日本文と比較してみると分かるとおり、明らかに日本語の語順の影響を受けていると思われる。

[14] *My favorite play is basketball.

[14]' 私の好きなプレイはバスケットボール。

[15] *Doraemon like is Dorayaki.

[15]' ドラえもんが好きなのはどら焼き。

[16] *Doraemon is also(always?) I help is.

[16]' ドラえもんはまた（いつも？）私を助ける。

[17] *Ichirou is high school in graduation after Orix enter.

[17]' イチローは高校卒業後オリックスに入った。

[18] *It's 7:10 pm get home.

[18]' 7:10に家に着く。

[19] *She is maybe music like.

[19]' 彼女はたぶん音楽が好き。

[20] *She is interesting think.

[20]' 彼女は面白いと思う。

ただし[14]については"play"を名詞として使っている可能性もあり、その場合には、これは文法上ではなく語彙上の「エラー」ということになる。

ところで、それぞれ英文と日本語文とを比較すると、日本語の「～は」に当たる部分に"is"が使われていることがわかる。授業では"is"の意味を「～である」と学習しているはずであるが、おそらく英語で"is"が主語と補語とを繋ぐ働きをすることと、日本語で「～は」が主語と補語とを繋いでいることとが意識の中で結びつき、"is"が「～は」の逐語訳として使われるようになったものと思われる。また、[18]には時刻を表す"it"という英語の要素も入っており、これは日本語の語順のみによって英文を扱っているレベルから一歩進んだ段階であると言える。

4.2. be 動詞の欠落

以下のような be 動詞の欠落も、中学生による英作文の中でしばしば見られる「エラー」である。

[21] *My sister elementary school teacher.
[22] *He popular in the States.
[23] *He from Aichi.
[24] *My mother playing tennis.
[25] *Grandmother making my breakfast and dinner.
[26] *I looking baseball every day.

これは Dulay et al. (1982)の表にも見られる Developmental Error であり、さらに[24][25][26]のような進行形での be 動詞の欠落は、Richards (1971)の表でも Developmental Error として挙げられている。その他の、

[27] *My father name (name).
[28] *I friend (name).

のように所有格標識の欠落を伴ったものや、

[30] *I'm friend Doraemon.
[32] *I'm family father and mother and Doraemon.
[33] *I'm birthday, December twenty-eighth.

のように"I'm"と"my"との混同を伴ったものについては、Dulay et al. (1982) や Richards (1971)の表にはリストアップされてはいないが、ただこのように be 動詞の欠落が頻繁に起こるのは、すべて be 動詞の性質そのものに起因すると思われる。Quirk et al. (1976) が繋辞としての be 動詞について述べているところによると、それは実質的な意味内容はほとんど持っておらず、ただ主語と補語とを結びつけるためだけに用いられているものなのである。そのように繋辞としての be 動詞が意味的に曖昧な存在であることが、学習者にその存在意義が意識されず、欠落させられてしまうことにつながるのであろう。

4.3. 主語と be 動詞との不一致

英語では主語の人称や数によって be 動詞がどの形をとるべきかが決まるのであるが、その規則が定着していない段階の英作文では、

[34] *My parents is (name) and (name).
[35] *Their songs is very good.
[36] *They was popular in Japan.
[37] *Japanese famous people is Ichiro.
[38] *Japanese famous people is Ayumi Hamasaki.
[39] *Japanese famous people is Smap.
[40] *Both group is very omoshiroi(funny).
[41] *My brother and father is played baseball yesterday.
[42] *My father and I is like fishing.

のような数の不一致や

[43] *I is Jaian friend.
[44] *Me is fan.
[45] *English teacher am (teacher's name).

のような人称の不一致がよく見られる。その中でも特に目立つのは、複数形の主語や 1 人称単数の主語に対する"is"の過剰使用であり、上の例文でも[45]以外の文にはすべて"is"が使われている。

いくつかの活用形の中で特定の形のみを"archi-form"として使用することによる「エラー」については Dulay et al. (1982)によって Developmental Error の一つとして紹介されている。しかし、その中でも特に"is"が"archi-form"として選ばれることについては、それがどの母語話者にも言えることなのか、それとも日本人特有のことなのかを、現段階で断定することはできない。ただ、生徒の使っている教科書の構成を考えると、これが教材配列による影響である可能性はかなり大きいのではないかと思われる。その教科書では、生徒が初めて be 動詞を複数の主語とともに使うのは 1 学年の 2 学期に入ってからであり、それまでの数ヶ月間、be 動詞は単数の主語との組み合わせのみで用いられる。そしてその場合、"I"および"you"以外の主語には常に"is"が用いられるのであり、その意味では"am"や"are"は特殊な形なのである。複数の主語が導入された後は、むしろ"are"の方が一般的

に使われる形となるはずなのであるが、学習初期における数ヶ月間の“is”の印象があまりにも強いことに加えて、教科書では複数形の主語に“are”が使われることが重点項目として扱われていないこともあり、“is”は確かに“archi-form”として選ばれやすい状況下にある。

4.4. 補語と be 同詞との不一致

この「エラー」には、主語の数が誤っている場合と補語の数が誤っている場合との 2 つのパタンがある。

[46] *My friends name is Jaian, Suneo, Shizuka.
[47] *Japanese famous soccer player is Nakta, Ono, Inamoto, Yanagihara.
[48] *My friend is (name) and (name).

のような文では複数形にするべき主語が単数形になっており、これは主語を用いる際に数についての考慮がなされなかったことの表れであると言える。これらの文においては be 動詞が表面的には正しい形をとっていても、主語が正しく複数形で使われた場合においても be 動詞がそれに応じた形で使われるかどうかについては疑問が残る。

一方、補語における数標識が誤っている

[49] *She's best friends.
[50] *They are my friend.
[51] *My aunt and uncle are teacher.

のような文では、be 動詞は主語との関係において正しい形が選択されており、be 動詞の用法それ自体については何の問題もない。

4.5. 文の構成上の誤り

これは be 動詞の「エラー」と言うよりも、be 動詞を含めた文全体の構成に関する「エラー」である。 その中で特定の単語の位置のみが誤っている例として

[52] *My mother's making dinner always.
[53] *My friend Jaian be want to singer the future.

のような文がある。[52]では be 動詞の後に来るべき“always”が文末に来ているが、これは、“always”を置くべき位置がよく理解されておらず、文の構成を乱さずにすむ文末を選んで置いた結果であろう。[53]では“want”の 3 人称単数標識や“the future”の前の前置詞が欠落してはいるが、語順として誤っているものは“be”の位置のみであり、これは、主語の後に be 動詞を置くという意識が“to”の後に来るべき“be”を移動させてしまったことによるのではないだろうか。

文全体が英語の語順から外れている例の中で、

[54] *Beef is very like.

[54]' 牛肉はとても好き。

[55] *My grandmother is very work and very fine.

[55]' 私の祖母はとても働くしとても元気。

[56] *Doraemon is pocket very very nice!!

[56]' ドラえもんはポケットがとてもとてもすてき。

[57] *Japan in famous girl is Ayumi Hamasaki.

[57]' 日本で有名な女性は浜崎あゆみ。

[58] *I how old is twelve.

[58]' 私の年齢は 12 歳。

などは、付記した日本文からもわかるように日本語の語順で構成されている。また、be 動詞の位置のみが誤っている文の中でも

[59] *First CD is name Apollo.

[59]' 1 枚目の CD は名前はアポロ。

[60] *Tsuyoshi is birthday 4/10.

[60]' 剛は誕生日が 4 月 10 日。

などはやはり日本語の語順の影響を受けている。

一方、次の例では、所々が英語の構造になってはいるものの全体的に見ると日本語の語順からも英語の語順からも外れている。

[61] *My name is Nobi Nobita elementary school.

[62] *Song is A Song For XX atc M is Seasons.

[64] *That are song is very good.

[65] *My it's 6:30 am get up, it's 7:40 am leave for school.

[66] *My brother it's birthday, April 2.

これらの文は見るからに思考の流れのままに語句を並べただけのものであり、言語規則と言えるものが安定した形で機能しているようには思えない。ここではbe動詞は文中で不規則に用いられており、所々で思考の断片を繋ぐ働きをしているかのようである。おそらくこれは、言語が規則を持った体系として意識される前の段階のものであろうが、もしかしたら英語が日本語とは異なる新しい言語体系であることを意識している現れなのかもしれない。

4.6. "I'm"と"my"との混同

次に示すのは"my"が使われるべきところに"I'm"が用いられている例である。

[67] *I'm father name is (name).
[68] *I'm name is (name).
[69] *I'm friends is Doraemon, Jaian Dekisugi, Suneo, Shizuka,

この「エラー」はRichards (1971)やDulay et al. (1982)の表にはリストアップされておらず、したがって他の母語話者にも同様の「エラー」が見られるかどうかは不明である。ただ、これが生徒の用いている教科書での教材配列の影響によるものである可能性は考えられる。つまり、中学校に入学して初めて学ぶ構文が"I'm"であり、その後しばらくの間は"I'm"を用いた文を集中的に練習するため、"my"を覚えた後にも"I'm"の印象が強く残ってしまうのである。

4.7. 主語+be動詞の欠落

次の文では、be動詞だけではなく主語までもが欠落している。

[70] *(school name) teacher.
[71] *From Tokyo.
[72] *But bad.

現在進行形における主語およびbe動詞の欠落についてはDevelopmental Errorの一つとしてDulay et al. (1982)の表に例文が挙げられており、日本人中学生による「エラー」もこれと同質のものであると思われる。ただしそれを断定するためには、さらにデータを集めて検討を行なう必要がある。

4.8. 時制の誤り

本研究のデータはいずれも現在の状況について書かれた英作文であり、その中で be 動詞が過去形や未来形で使われている場合、それは「エラー」ということになる。

[73] *She will be able to speak English.

[74] *Ayu was singer.

[75] *They was popular in Japan.

[73]の「エラー」は、未来について述べている文の"will be able to"を教科書からそのまま抜き出して使ったことによるものであり、[74]と[75]はおそらく現在形と過去形との混同が原因となっているものである。このことについてもこれ以上の考察を行なうためには、さらに多くのデータを集めなければならない。

5．結論

これまでの考察を概観してみると、be 動詞絡みの「エラー」についての3つの事実が浮かび上がってくる。第一に、be 動詞はその曖昧な性質ゆえに様々な「エラー」を引き起こす要素を持っているということである。繋辞としての be 動詞が実質的な意味内容を持たずにただ主語と補語を繋ぐだけの存在であることから、その存在意義が認識されずに欠落させられたり、繋ぎとしての機能が過剰適用されて本来使われることのない部分に使われたりするのである。また、日本語の影響による語順の「エラー」を含む文の中では、「～は」の逐語訳としても使われている。

第二に、「エラー」には確かに段階があり、それが学習者の習得レベルを反映しているということである。例えば日本語の語順で構成されている文や思考の流れのままに語句を並べたような文においても、部分的に英語の構造が挿入されていることがあり、学習者に少なくともその構造は定着したのだという現れであると受け取れる。さらに進んだレベルでは英語の要素と日本語の要素の占める割合が逆転し、例えば be 動詞と一般動詞の併用のような、英語の構造が主体となった文での「エラー」が多くなるのであろう。

第三に、Richards (1971)や Dulay et al. (1982)の表にリストアップされている Developmental Errors が日本人の英作文に見られた場合、それは普遍的な発達過程として現れているだけではなく、日本語の文法からの影響も相乗効果を与えている可能性を排除できないということである。例えば"is"の過剰使用に関しては、特定の活用形を"archi-form"として使用する Developmental Errors として説

明を行なったが、日本語の「～です」が主語の性や数によって変形することはないという事実は全く影響を及ぼしていないと言えるだろうか。これに対する答えを求めるためにはさらに研究を進めていく必要があり、現段階においては、確実に日本語からの影響によって生じる「エラー」であると言い切れるのは、語順に関する「エラー」のみである。

これまでに論じてきたような「エラー」が言語習得に必要不可欠な過程であるならば、指導者は「エラー」をいかに回避するかを考えるよりも、それは当然現れるべきものであるとの前提に立ち、そこからどのように次の段階へと導いたら良いかを考える方が合理的である。「エラー」はその学習者の中間言語構造および現在の習得段階を知るための有効な手がかりとなるのであり、指導者にはこれを的確に捉えて見通しを持った英語学習指導を行なっていくことが望まれる。「誤答分析」は、そのための有益な情報を数多く与えてくれるのであり、指導者がこれを有効に活用することによって、学習者の自然な言語習得過程に沿った教材配列や指導計画を作成することが可能となるのである。

参考文献

Asano, H. et al. (1999). *New Horizon English Course 1.* Tokyo Shoseki.

Asano, H. et al. (1999). *New Horizon English Course 2.* Tokyo Shoseki.

Asano, H. et al. (1999). *New Horizon English Course 3 Teacher's Book.* Tokyo Shoseki.

Brown, H. D. and Gonzo, S. T. (ed.). (1995). *Readings on Second Language Acquisition.* Prentice Hall Regents.

Corder, S. P. (1967). The Significance of Learners' Errors. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition,* 19-30.

Corder, S. P. (1971). Idiosyncratic Dialects and Error Analysis. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition,* 158-171.

Dulay, H. et al. (1982). *Language Two.* Oxford University Press, Inc.

Johnson, J. S. and Newport, E. L. (1989). Critical Period Effects in Second Language Learning: The Influence of Maturational State on the Acquisition of English as a Second Language. In Brown, H. D. and Gonzo, S. T. (ed.). *Readings on Second Language Acquisition,* 75-115.

Quirk, R. et al. (1976). *A Grammar of Contemporary English.* (6th impression). Longman Group Ltd.

Richards, J. C. (1971). A Non-Contrastive Approach to Error Analysis. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 172-188.

Richards, J. C. (1972). Social Factors, Interlanguage, and Language Learning. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 64-91.

Richards, J. C. (ed.). (1977). *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition* (3rd ed.). Longman Group Limited.

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修)